時間の徐行が見られ、人間關係に强い關心が拂われ、登場人物も市井人であるが、決して輕蔑的にのみは描き出されていない。白話短篇小說とは、形式的にも內容的にも異なるものであると筆者は述べ、それゆえに時代の下がった小說の分析は、筆者の分析と非常に異なったものになるであろうと、論を結んでいる。筆者の分析は、その題にあるように、中國短篇小說の早期と限定されており、限定の枠內に於ける分析であり、今後の研究發表が待たれる次第である。

（京都大學　山崎康子）

The Military Romance: A Genre of Chinese Fiction

C. T. Hsia

夏志清「軍記物語：中國小說の一樣式」

軍記物語は、人間の特殊な行動型式（戰爭への從事沒頭）との、樣式化された密接な關係によって、必然的に人間のもつ日常的な關係性や感情を無視するか或いはおきまりの表現に終らせてしまう——筆者は序文に於いてこのように軍記物語に對する一つの性格づけを行なっている。

戰爭への從事沒頭——そうした人間を描き出そうとする時、その人間が彼の能力に於いて、性格に於いて、更にまた運命に於いて、戰爭という特殊な事態にいかに絡め取られ易い存在であるかという敍述が爲される背後には、おそらく二つの要素が匿されていると考えられる。一つは、元來貧弱な生活圈・存在のあり樣に甘んじていながら、一旦その改變を迫られた時、人間は貧弱さへの慣れを案外捨て切れないものだということ。もう一つは、最初の理由とは全く對照的に、觀念の世界では全くラディカルな形で、人間は彼のもつ限定された時間性・空間性を解體することができるということである。「主要な英雄達はみな、若いうちに共通した基礎的體驗（當然のことながら尋常ならざる體驗である——評者）を經る」という作者の指摘は、軍記物語中の英雄が、一般の人間との現實的な斷絕、及び幻想世界での連續をふたつながら保持していることを、無意識のうちに衝いている。

さて、筆者が行なった軍記物語の性格づけに對する以上のような分析に基いて、筆者の指摘した軍記物語群の內容上の共通性、すなわち軍記物語の具體的特徵とでも言うべき要素を考察してみたいと思う。

(1) "principal hero"（〃水滸傳〃の宋江、〃說岳全傳〃の岳飛といった人物）が天子への全き忠誠を誓う限り、"comic hero"（それぞれ李逵や牛皐といった人物）はその率直な天子批判にも關わらず無害な存在となる。

筆者は、政府の檢閱迫害の中で無政府的氣質の英雄に對する愼重な喜劇的取り扱いがなされたと主張している。「政府の檢閱」という理由は何かにつけて登場する萬能藥であるが、実の所餘りよく效きそうにない。つまり本質的な所に觸れ得ないのである。先に擧げた二つの要素のうち、前者を宋江が擔い、後者を李逵が擔っている——人間の直面する現實と彼の抱く幻想が、作品中の二人の人間の關係性という形で示されたに過ぎない。そしてここではそれを見拔くことができれば十分なのである。「宋江の反動的性格は……」などとおひとよしなことを言っている暇はない。兩者の關係性は、わたしたち一人一人の內的問題として、わたしたちを脅かし始めるのだから……。

(2) 夷狄の民であるがゆえに、軍記物語中の女丈夫は愛情を追求する自分の姿に羞恥することもなく、中國人の女性につきまとうモラル上のためらいにも妨げられない。

こうした女丈夫は何らかの神通力を備えていて、彼女達が結婚を運命づけられた男子よりも偉大であることを特徵としている。女丈夫が夷狄の女性として描かれたのは、現実的な隣人たり得ない、すなわち生活臭のない野放圖な女性であるがゆえに、極めて自然に超人化作用を受け入れたからである。（もちろん、幻想の度合が深まれば、戰「場」も遠隔化するから、生活臭のない存在が登場しやすくなることも考慮されよう。）

(3)　英雄に對する理解の變り易さ、英雄の功績の忘却、寵姫寵臣の讒言に從って行なう英雄の處罰といった傾向によって、「昏君」こそが讀者を憤激させる。

こうした「昏君」は英雄の忠誠度を高める作用を果たしているという筆者の指摘に格別の異論はない。ただ確認しておきたいのは、英雄及び憤激した讀者とは全く異なって、「昏君」はいかにも地上的な存在だということである。もし天子が彼自身觀念の世界でのラディカルな變型を受けたならば、稀代の名君か惡虐非道の暴君か、二極のうちのいずれかに引き寄せられて、物語の前面に踊り出て來るに相違ない。物語に於ける「主人公——天子——佞臣」という圖式は、天子が主人公と佞臣という二極の中間で引き裂かれたままただ曝し物になっている點で、地上のシリアスなそれとは全く質を異にするものと言えるが、天子が一人取り殘された形で、いかにも地上的に介在することが、二極の相容れざる對立を複雜化したことは確かである。

戰爭を主軸にした軍記物語の魅力とは、一見無茶苦茶とも思える幻想の飛躍そのものだろう。本論文は英雄及びそのライバル、彼らのもつ魔力、陣立て、女丈夫の存在など、具體的にその魅力を拾い出している。然しながら、指摘された個々の魅力は、「これもあればあれもある」式の羅列の中で浮遊しているという印象を免れない。「筋書の共通性」以外の何を筆者は言い得たか……。戰爭への從事沒頭という主要な性格と日常性との表面的斷絶が、單にそう指摘されただけに止まった——そのことがこの論文の限界を形造ったように思えてならない。

（京都大學　小濱陵一）